

平成二十六年四月二十八日

日本語の表記法は表意文字と表音文字とを混用せるものにして、余久しく之世界に類を見ざる獨特のものなりと思ひしが、古代エジプトのヒエログリフの表記においても同じく兩種の文字を混用せりと聞く。思ふにこの表記法は大なる初期投資を要するも一旦習熟せば極めて效率的なるものなり。名詞及び動詞、形容詞の語幹は多く漢字をもつて表すれば全體を一瞥して容易に文章の大意を把握するを得。

かかる表記法の發達せるは、本來表意文字たる漢字を文法、音韻構造を全く異にする日本語の表記に用ゐたるに因る。漢字の導入當初は漢文即ち中國語を表するため用ゐられたるも。直ちに日本の固有名詞を書き表す必要生じ、ここに表意文字の表音的使用始まる。一旦表音的使用の可なるを知れば、それを民俗歌謠或は傳承の記述に應用するは極めて自然の成り行きなりき。

かくて日本最古の和歌集萬葉集の編纂行はるるに至る。その表記法において漢字の読み方は、日本語を以つて讀む訓讀みと、中國語の模倣により讀む音讀みの二途に分かる。「山」を「やま」及び「さん」となすが如し。阿ーあ、以ーい、宇ーう、江ーえ、於ーおの如く漢字を表音的に用ゐればあらゆる日本語を漢字もて表すことを得。かやうに日本語の表記に當てらるる漢字には複數の選擇ありしが、時代の下るに應じて次第に整理せられ、遙か後世の明治に至つて一對一の對應成立す。その後漢字を崩したる形より平假名生ず。漢字と假名の交じりたる文體は主として女性の間で使用せられ、男性は漢文を用ゐるを原則とせり。されど平安中期朝野に和歌の隆盛を見るに及び、男性も漢字假名交じり文に手を染むるに至る。

他方寺院にては讀經の便宜のため、漢字の一部分を取りこれをを用ゐて發音を示すこと修道僧の間に行はれ、やがて之定着して片假名となる。阿の偏を取りてアと記すが如し。この片假名と返り點などを利用する訓讀法の開發により、漢文を日本語として讀むこと可能となり、膨大なる漢籍我國知識人の囊中に入る。

漢文化の影響を受けし周邊の諸民族のうち何故に日本人のみがかかる表記法を産み出したるかは不思議なることなり。實は朝鮮半島にても漢字を借りて朝鮮語を表記せむとの努力はなされたり。三國時代より統一新羅の時代にかけて吏讀と稱する表記法下級官吏によつて行はれたり。漢字の表意的使用(名詞及び動詞、形容詞の語幹)と表音的使用(助詞、助動詞及び語尾)の組合せと言ふ點に關してはこの表記法は萬葉集や古事記の表記體系と軌を一にせるものなり。一例を擧ぐるに「吾衣」の「吾」は表意的使用にして「私」を意味し、「衣」は表音的使用にして「イ」||「ガ」にあたり、合はせて「私が」の意なり。

また口訣として漢字またはその部首を表音的に用ゐることも行はれき。

されどその後日本に於けるが如き表意體系の發展はなく、漢字は専ら漢文の表記に徹することとなり、朝鮮語の表記は後に世宗の發明にかかるハングルによることとなる。漢字とハング

ルは融合せず。漢字とハングルを組合はせたる朝鮮語の表記は遙かに下つて日本統治時代の所産なり。

何故吏讀爾後の發展を見ざりしか。一つには朝鮮語の發音複雑にして漢字によりて完全に表現すること能はざりし事もあらむ。されど更に大なる原因として漢文化を信奉する彼の地の知識階級の反撥を擧げざるべけんや。□